

多様性に富む人々が編む 喪失から再生への物語

中野 理恵

後味の爽やかな映画である。舞台はロンドンのノッティングヒル。菓子職人のイザベラは菓子学校時代からの親友サラとともに、菓子専門店をオープンさせようと店舗も契約していた。サラは、ロンドンで人気のシェフ、オットレンギ(実在の人物)のもとで修行を積み、その腕は保証済みだ。

さあこれから新店舗に向けて改装しようと準備していたとき、サラが亡くなってしまう。サラの腕に期待して投資した人々が離れていき、なのに、家賃は払わなければならない、途方に暮れるイザベラ。一方、父親を知らずに育ったサラの娘クラリッサは、母親を亡くした悲しみから立ち直れず、ダンサーへの道を諦め、祖母のミミの家に居候をしてフリーター生活をしていた。ミミはミミで、不仲のまま亡くなってしまった娘のサラを思うとやるせなくなり、〈後悔先に立たず〉の暗い日々。そんな3人がサラの遺志を継ぎ、菓子店オープンに向けて立ち上がる。

イザベラが厨房を担ったのだが、独自の味をセールスポイントにしたかった3人は、新たに職人を募集する。すると、ミシュラン2つ星レストランのスターシェフ、マシューが応募してきた。どんな高級店でもよだれが出るほど欲しい腕なのにどうして、と訝りながらも3人は深く追求せず彼を迎え、店名も〈ラブ・サラ〉と決めて、オープンの日を無事迎えることができた。

〈ラブ・サラ〉の出だしは冴えなかったが、ある日ミミが、配達に来たラトヴィア人青年が国のお菓子を懐かしむ様子を見て、来店客の希望に沿い、世界中のお菓子をその都度作ろうと提案する。人種のるつぼであるロンドンで、彼女の案は大成功。忙しい日々を過ごしていたある日、東京から来たという日本女性から「抹茶のミルクレープを」と



©FEMME FILMS 2019

の注文を受ける。だが4人とも、想像がつかないのだった。

果たして彼らは〈抹茶のミルクレープ〉を無事作ることができるのか。注文してきた女性の正体は？ミシュラン2つ星のマシューがなぜ、無名の菓子店に応募してきたのだろうか…。

ミミ役のベテラン俳優セリア・イムリー(『ブリジット・ジョーンズの日記』(2001)など出演)が、^{しわ}皺だらけの顔で、しかも皺の出ている首をさらした服装で出ずっぱりなのがうれしくて印象に残る。監督のエリザ・シュローダーは本作が長編監督デビュー。幼い3人の子どもと夫とともにイギリスで暮らすドイツ人女性。プロデューサーのラジータ・シャーはインド出身。スクリーンの表裏ともに、年齢、出身国や性別もバラエティーに富み、現在のイギリス、いや、世界の大都市を象徴しているのではないか。

硬い表現をするならば、登場人物それぞれが喪失から再生へと向かう物語を、菓子作りと菓子店経営を軸に軽いタッチで描いた高感度の作品である。

《Cinema Information》

『ノッティングヒルの洋菓子店』

イギリス映画(98分)/監督:エリザ・シュローダー/
12月4日(金)よりヒューマントラストシネマ有楽町
ほか全国順次公開。

なかのりえ:映画プロデューサー、ディストリビューター。
(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館,2018)等。